

# 肢体不自由特別支援学校における授業のデザイン・実施・評価 に関わる実践研究 I

—チーム・ティーチングにおける意思決定論モデルの導入—

○内海友加利<sup>1)</sup>

平山彩乃<sup>2)</sup>

安藤隆男<sup>3)</sup>

1) 筑波大学大学院人間総合科学研究科

2) 茨城県立水戸特別支援学校

3) 筑波大学人間系

KEY WORDS: 意思決定論モデル

チーム・ティーチング

授業分析の手続き

## I. 問題の所在と目的

**1. わが国の授業研究の動向:** 学校教育活動の中核を担う授業は、教師の専門性に依拠した営為であり、教師は長い教職生活を通じて教えるために学ぶことが求められる(安藤,2009)。長きにわたり授業研究が行われてきたが、その動向として、従来は授業の教授や学習における顕在化する行動を量的に扱う行動主義的なアプローチが多く採用されてきた。1990年代以降、教師の成長・発達に視点を置いた授業研究や質的なアプローチが導入されるようになり(安藤,2009)、授業研究の質的、量的な充実をもたらした。

**2. 特別支援教育における授業研究の動向:** 特別支援教育に着目すると、その成果は限定される。『特殊教育学研究』に掲載された実践研究論文は、仮説検証型臨床として指導の成果を事例的に取り上げられるものの、その数は依然少なく、教師の成長・発達に焦点を当てた研究や質的研究法を採る研究に至っては限定的である(安藤,2009)。児童生徒の障害の重度・重複化、多様化が顕在化する特別支援学校の授業では、チーム・ティーチング(以下、TT)等が日常的に導入されており、授業研究の量的拡大及び質的充実に基づく成果の積み上げが期待されているといえる。

**3. 目的:** 本研究は、特別支援学校、とくに児童生徒の障害が重度・重複化、多様化が指摘されて久しい肢体不自由特別支援学校のTT授業に焦点をあて、意思決定論モデルの導入と適用事例による授業改善に関する報告を行う。前者はIとして、後者はIIとしてそれぞれ発表するものである。

## II. 特別支援学校におけるTTに関わる授業研究の動向

**1. TTの現状と課題:** 特別支援学校では、授業の多くがTTによって実施されており、授業の計画から実施、評価に至る一連の過程が複数の教師によって営まれることに特徴がある(安藤ほか,2010)。一方で、教員の連携やメインティーチャー(以下,MT)、サブティーチャー(以下,ST)の役割の明確化とこれに基づく的確な教授活動の展開など、多くの課題が指摘されてきた(例えば,安藤ほか,2005)。

**2. TTにおける意思決定論モデル導入に関わる先行研究:** Peterson & Clark(1978)らの知見を参考にした吉崎(1997)によると、教師の意思決定プロセスはFig. 1の3つの決定ポイントを経て行われる複雑な情報処理のプロセスであるとされた(安藤,2009)。吉崎(1997)のモデルは一斉授業の形態を想定し、授業デザインと実態のズレに着目するものである。これに対して、安藤(2000, 2001, 2002)は、特別支援学校で多く採用されるTTには授業デザインと実態とのズレの他に、授業者間の意思決定の位相にズレがあることを考慮し、大学院生が取り組むTT授業を対象に、授業者間の意思決定の機序を分析した。手続きは、吉崎(1997)が提唱するVTR 中断法を参考にした。VTR 中断法は、授業の映像から、授業目標を達成するポイントとなる場面のうち計画(予想した子どもの反応)と実態(実際の子どもの反応)とにズレが生じた場面を抽出し、授業者と他の教師が同時視聴しながら最善の代替策について話し合うものである。

TTにおける授業者の意思決定の授業分析の結果、授業デザインと実態とのズレ認知に授業者間で違いが生じることが示された(安藤,2000, 2001, 2002)。役割に基づく各教師の有効な意思決定の実現のために、とくに授業過程で各授業者が分有する子どもの情報をMTとST間、STとST間で相互に発信—受信しながら情報の共有化を図ることの大切さが示唆された(安藤,2009)。

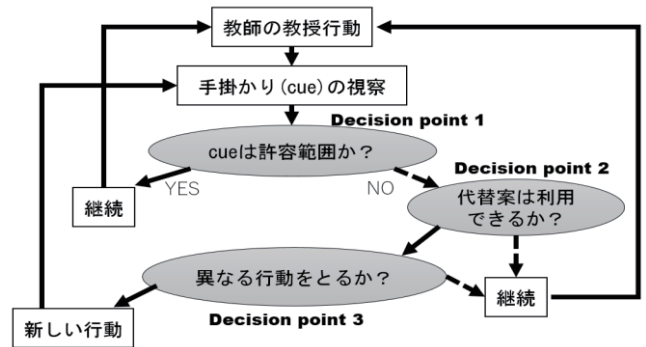


Fig. 1 教師の意思決定モデル

出所: 安藤(2009; Peterson & Clark, 1978)を改編

## III. TTにおける意思決定論モデルによる授業分析のねらいと手続き

**1. ねらいと手続き:** 安藤(2000, 2001, 2002)を参考に、肢体不自由特別支援学校で教師が取り組むTT授業に意思決定論モデルを導入し、これに基づき授業分析を行った。2回の授業分析を行い、それに伴うねらいと手続きをTable 1に示した。

Table 1 授業分析のねらいと手続き

ねらいと手続き	
第1回	【TT授業の現状分析】 映像記録に基づく授業者の意思決定場面の抽出 (MT,ST個々にインタビュー)
	次時の授業デザイン及び実施上の改善のため、 各教師の意思決定場面の分析結果を報告
第2回	【TT授業の再デザイン・改善分析】 授業の再デザインの確認及び実施上の改善について、 映像記録に基づく授業者の意思決定場面の抽出 (MT, ST個々にインタビュー)
	各教師の意思決定場面の分析結果を報告 前回のフィードバック以降の改善事項 本授業研究の成果と課題

**2. 分析の視点:** 意思決定場面及び手掛かり(cue)を抽出するために、授業デザインと実態のズレ認知に授業者間で違いが生じているかどうかを分析の視点とした。具体的な授業分析と結果について、IIで報告する。

**主要文献:** 1) 安藤隆男(編)(2000,2001,2002) 障害児教育における授業分析(XI)~(XIII),上越教育大学実践場面分析演習報告書. 2) 安藤隆男(2009) 授業研究法. 前川久男・園山繁樹(編),障害科学の研究法, 明石書店,191-209. (UTSUMI Yukari, HIRAYAMA Ayano, ANDO Takao)